

九月時原山川南江の原稿を塚本仲子代讀の
中止辭教を原自らしつた。

山内抄にはモスリシ女工の立身にして昔
字力行の人あるを思はば頗る感激して大正
十年八月の三田博士の筆談の略にも赤瀧會
人の人々に應接せられたることをあり最近
あひは博文館の編修委員たる若藤某の庇
護のせとに文筆労働に従事おし目下は大
阪にありて阿部某大原研究所員とて其に赤
衛社を經營せしつゝあり

新婦人協會の理事塚が山内抄を捉つて置き
あかす南會の際にまつて徳島の講演を拒絶し
左の如きは前体の如き事由にあつたが要の東京
の新開は総人ど全部が筆をえりへて三号流字
を用おし國士めおの横暴を攻撃した。
中のは(やまと)東京組の西新開は可なり年
川原く國士めあを川翻して其の同情を寄せ
乙はあかすにまつて知山たしとあるを山内抄
にはあかす修正の溝邊會と紛擾に際し入らしむ